

一つのメルヘン

なかはら ちゅうや
中原 中也

秋の夜は、はるかの彼方に、
小石ばかりの、河原があつて、
それに陽は、さらさらと
さらさらと射してゐるのであります。

陽といつても、まるで矚石か何かのやうで
非常な個体の粉末のやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、

淡い、それでゐてくつきりとした
影を落としてゐるのでした。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、
今迄流れてもゐなかつた川床に、水は
さらさらと、さらさらと流れてゐるのであります……

〈出典 『中原中也全集 第1巻』(角川書店、一九六七年)〉

【著者】 中原 中也 (なかはら ちゅうや)

一九〇七(明治四〇)年—一九三七(昭和一二)年
詩人。山口県の生まれ。

【著書】 『山羊の歌』 『在りし日の歌』 など